

（以下、本文の大部分は非常に薄い文字で印刷されており、ほとんど読み取れません。内容は、Tanjung Kodok での観測に関する詳細な報告と思われる。）

Tanjung Kodok における観測

近畿日本ツーリスト虎の門営業所によるツアー 青沼俊文

ジャワ島スラバヤの北西約60kmにあるTanjung Kodok（東経112°21'29"、南緯6°52'01"）が我々（吉田正太郎氏ほか21名）の観測地であった。現地は、名称（“かえるの岬”の意味）の通り、海に張り出した岬で、周囲には椰子の木が散在する荒地で

ある。6月9日に降ったスコールで足場はかなり悪かった。

同地点には、我々のほかに、アメリカのコロラドから来た観測隊と現地インドネシアの気象観測のチーム（約20名程）、そして日本のNHKに衛星中継画像を送るためのインドネシア国営放送のチームが陣取っていた。アメリカ隊は、かなり大がかりな観測器材を3基セットしており、そのうち1台を皆既中操作しているところがNHKの画像で写し出されていた。インドネシアのチームは、小型の電波望遠鏡を使つての電波観測、ラジオゾンデをとばしての気象観測などに取り組んでいた。

我が隊は、日食前日の6月10日にスラバヤから観測地の下見に出かけた。そして私を含む9名の希望者が現地に野営し、観測地の確保、赤道儀のセッティング、南天星野の撮影等にあたることになった。10日は、夕方まで曇りで、そのうえときおり雨がバラつく状態であったが、夜になって晴れ上り、南十字、 α -Cen、 β -Cen、 ω -Cen（ ω 星団）、明け方になって α -Eriなどが姿を現した。しかし、ものの30分もしないうちに雲がかかり、あとはそのくり返し、という状態が続いた。

日食当日の朝はかなり雲が切れ、スラバヤを早朝出発してきた12名の人も含め、希望を大としたが、食分が進むにつれ雲が広がる気配で、連続食分も露出を最大5段位変えて切らなければならなかった。第2触時には、雲は薄くなったものの、かなりの領域に広がり、残念ながら今回のコロナは薄雲を通して見るようになった。第2触は、隣りのアメリカ隊によると、4h33m49s（U、T）であった（前々日に補正しているとのこと）が、これは光球による連続スペクトルが消失した時刻とピッタリ合致していた（私が撮影したフラッシュ・スペクトルの連続写真による）。コロナやプロミネンスの状況は、他の隊とほとんど変るところがないものと思われるが、残念なこととして薄雲のため外部コロナが不鮮明であったこと、そのほか、皆既中の空がかなり明るかったこと、500mmの直焦点の写野の隅に、6月3日に合をすぎた火星（1.7等級）が、コロナとともに写っていたことなどを付記しておきたい。

第3触は、同じアメリカ隊の予報によれば、4h38m58sであったが、その9秒前にはすでにフラッシュ・スペクトルの中央に光球からの連続スペクトルが混ざり始めており、かなり深い谷のところまで生光になったことになる。実際、第3触のダイヤモンドリングは見事なもので、月の西のへりに現れた光点が、急速に光の洪水となってあふれ出していく過程は感動的であった（その様子は、NHKの中継でもかなりよくとらえられていたので、御覧になった方も多いのでは？）。写真でも、光点が広がっていく過程を4カットでとらえることができたが、コロナの方が、雲のせいかわ若干露出不足であった。又、4h39m00sには、光球面の連続スペクトルがはっきり3つに分れており、小規模ながらベリービーズが見られたことであろう。第3触以降は、連続食分と部分食の撮影（合成F.L.1500mm）を続けたが、第4触の少し前に厚い雲の中に太陽が入ってしまい、その撮影はできなかった。